



⑭ 日中社会の共通性

『日中関係史』

先月、エズラ・F・ヴォーゲル氏の新作の邦訳版を日本経済新聞出版社から刊行した。『日中関係史——1500年の交流から読むアジアの未来』である。今回はこの著作から、日本の世界的な立ち位置を考えてみたい。

ヴォーゲル氏は日本では、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（1979年）の著者として知られるが、中国でも『現代中国の父 鄧小平』（邦訳：日本経済新聞出版社、2013年）というベストセラーを出している。彼が『鄧小平』の執筆に取り掛かったころ、私は研究助手を務めていたため、その縁で同書と『日中関係史』の翻訳を任されることになった。翻訳は集中力の要求される地味な作業で、私の性にはまったく合わない（昨年11月には自著『中国の行動原理』を出版したが、その方がずっと気楽だ！）。それでもこの2冊を訳したとなれば、中国での注目度は抜群。おかげでしばしば、「ヴォーゲル史観」を肴（さかな）に中国人と議論する機会に恵まれている。

社会交流史の視点

『日中関係史』は、過去3回起きた「一国が相手国からの学びをもとに国づくりを進めた経験」に焦点を当て、1500年間の日中関係史を概観する。それは①日本が遣隋使・遣唐使を送って中国に学んだ時代、②日清戦争以降、中国が日本から

近代化を学んだ時代、③72年以降、とりわけ78年以降に中国が日本に学んで改革開放を進めた時代、である。通常、歴史教科書の記述の中心には各国の政治体制の変化が据えら

れる。本書でもそうした説明は多少、盛り込まれているが、全体的には日中両国の社会の動向により大きな重みが置かれ、各時代の各国の社会構造や、両国間の交流に影響を与えた特定の人物やグループがハイライトされる。ヴォーゲル氏の本来の専門が社会学であることを考えれば、納得のいく手法だ。

ただし、こうした「ヴォーゲル史観」が本書の中でどれだけ貫徹できたかという点では、長年の研究協力者として少し不満が残る。古代史と近代史の部分では、ヴォーゲル氏の記述は一貫し、一般的な「一国史観」から距離を置いた「社会交流史」の提示にかなり成功している。しかし、第二次世界大戦後の現代史では、記述の大半が「一国史観」をベースに公的な日中外交史をなぞったものに留まる。同時代の社会学者として、多くの引揚者やビジネスマンに聞き取りを行い、大来佐武郎や下河辺淳といった人物と親しくしていた筆者であれば、もっと重層的な記述ができたのではと残念だ。

新たな世界構築の気概で

日本人の対中理解

とはいえ、本書が結果として、日中両国の社会に共通する文化的共通性を改めて強調したのは間違いない。ヴォーゲル氏は言う。「何世紀にもわたって中国と文化的に深いつながりを持ってきた日本は、…（アメリカよりも）ずっと深く広く中国と意思疎通を図れる。中国で暮らしたことのある日本人はアメリカ人よりはるかに多く、彼らは中国人と一緒に働く方法を知っている。…日本は（自分たちの近代化の経験から）中国の経済ナショナリズムをよく理解している」。

そうなのだ。実際のところ、世界に先立って中国人と接してきた日本人には、中国社会に広く存在する日本の社会モデルへの憧憬（どうけい）や、それを母国にそのまま適用できない苦しさがよくわかる。極めて全体主義的な手法ながら、習近平政権が国内でクリーンでグリーンな善政を志向する意図も理解できてしまう。

ただ、この立ち位置はいま、とても責任が重い。米中間の覇権競争が深刻化する中、中国では「自国なりの社会モデル」を追い求める声が強まっている。米国はそれを許容しそうにない。では米国モデルは、各国の人々にとって等しく万能なのか？

中国に対する世界最先端の理解力を持ちながら、自分も中国と数々の問題を抱え、米国の同盟国でもある日本。現状では、米中間でのわれわれの動き方によって、世界のあり方が決まってくるといっても言い過ぎではない。新たな世界を作るぞという気概を持って、新年に臨んでいこうではないか。

（益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授）